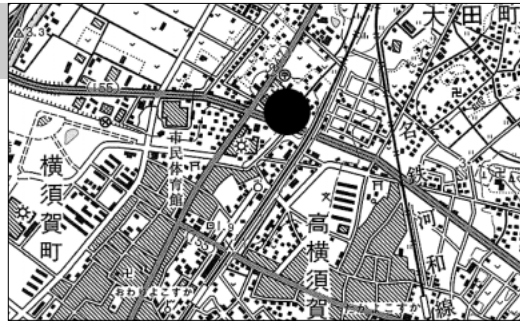


えぼし 烏帽子遺跡

所在地 東海市高横須賀町字烏帽子・踊場・尾之松地内
 調査理由 国道155号線建設
 調査期間 平成12年4月～9月
 調査面積 2,500㎡
 担当者 石黒立人・中野良法・木川正夫



調査地点(1/2.5万「鳴海」)

調査の経過 国道155号線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。なお、平成5年度にも隣接地の調査を当センターが実施している。今回の調査期間は平成12年4月から9月まで、面積は2,500㎡である。調査区は、国道155号線の建設予定地内を横断する通学路・生活道路の関係から、A・B・Cの三区を設定して実施した。

立地と環境 烏帽子遺跡は東海市高横須賀町字烏帽子(C区)・字踊場(B区)・字尾之松(A区)に所在し、伊勢湾に面する海岸線と並行する3条の砂堆(浜堤)列のうちの最も海岸線沿いの砂堆の東端に位置し、現地表面の標高は3m前後である。また、本遺跡の周辺には、同砂堆上に、弥生時代の遺跡と古代製塩遺跡が散在している。

調査の概要 平成5年度に実施した前回の調査では、遺跡の形成時期が、A期：縄文時代晩期から弥生時代前期(集落)、B期：弥生時代中期後半(集落)、C期：古墳時代前期(集落)、D期：古代(集落)、E期：江戸時代(「横須賀御殿」)の5期にわたることが明らかになっている。基盤層は比較的粗い砂層で、包含層も砂質である。包含層は、弥生時代までは黒色で旧地表面が有機質の黒色土壌で覆われていたことがわかる。古代以降は明褐色となっている。

A 期 B区で東西方向に掘られた長楕円形の舟形土坑(長さ1.95m、幅0.72m、深さ19cm)の西端に直径4～6cm程度の下呂石原石が35個詰められた弥生土器(高さ約30cm、水神平期;紀元前4世紀頃)の壺が土坑底から15cmほど浮いて出土した。下呂石は川原石状で、その大きさからみて木曽川下流域の河原で採取され、何らかの手段で烏帽子遺跡まで運ばれたものと思われる。被葬者は石器の工人か、採集された地域にゆかりの人が、などのことが想像される。弥生時代前期の墓は、県下ではこれまで土器棺墓、方形周溝墓が知られていたが、今回新たに土坑墓を加えることになった。壺は捧げ物の容器として用いられ、墓の上に据え置かれたものと考えられる。このような事例は県下では初めてである。

B 期 B区の長楕円形の土坑墓では北端に弥生土器(高蔵期)の鉢が底部に穿孔されて伏せられた状態で出土した。C区では、炉の焼け土を伴う竪穴住居や隅丸方形の竪穴状遺構数基等が展開する。

C 期 B区で北東から南西方向に掘られた長楕円形の舟形土坑(残存長2.23mで全長は不明、幅0.97m、深さ約35cm;3世紀頃)に、北東部でペンガラによって赤色に変色した部分が検出され、その内部および付近からガラス製勾玉1点、緑色凝灰岩製管玉6点、ガラス

製小玉28点とガラス製小玉の小片が複数個体分出土した。ベンガラによって赤色に変色した部分は長さ約50cm、幅約40cm、高さ約30cmで、葬られた人の頭部から胸部にかけて塗られていたかもしくははふりかけられたものと思われる。ガラス製勾玉・管玉・ガラス製小玉は首飾りとして一揃いのもので、首にかけられていたか、胸部に置かれたものと考えられる。ベンガラや朱などの赤色顔料の使用は、弥生後期から古墳前期では大型の墳丘墓の埋葬施設にみられるもので、土坑墓では珍しい。したがって、今回発見された舟形土坑は、それ単独で墓(土坑墓)というわけではなく、墳丘墓の主体部であった可能性が高い。ガラス製勾玉・緑色系ガラス製小玉は県下で初例である。ベンガラ塗布の埋葬法を含めて、他地域との関連を考える必要がある。

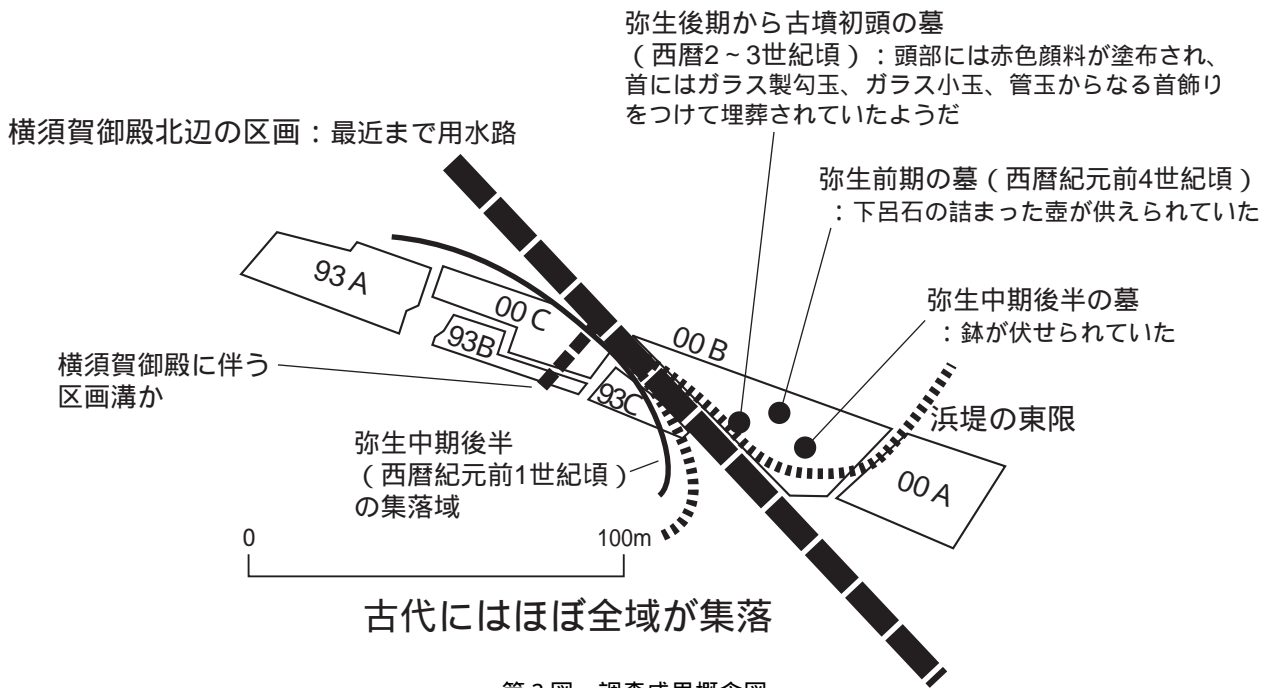
D 期 竈を伴う竪穴住居がB区で1棟、C区で2棟検出された。B区の1棟は軸が南北方向から約45度傾き、西北壁に竈を伴い、柱穴と一部に貼り床粘土が検出された。竈の粘土は比較的良好に残存していた。その他、隅丸方形の竪穴状遺構がかなり検出されているが、軸方向正北のものと約45度西に振れているものがあり、切り合い関係から前者がやや古い段階のもので、竈のない竪穴住居と思われる。B・C区で同時期の土師質竈が出土しているので建て替えのたびに移動させたと思われる。いずれもその埋土から当時の須恵器・土師器・製塩土器等が多数出土している。C区では須恵器・移動式竈片・貝層を含む竪穴状遺構が1基検出されている。また、C区中央南部に柱穴が分布し、1間×1間に並ぶ掘立柱建物がある。

E 期 B区南辺とC区北辺の水路(完掘幅約20m)は横須賀御殿(1666~1700)が作られたころ、砂堆を横断するように掘られ、幾度となく改修された水路である。明治になって公家(こうけ)川を横須賀入江に流入させた後、閉め切ったようで、現在は道路となっている。砂堆の砂を掘った水路なので砂の崩落防止のため粘土を厚さ約30cmにわたって貼り付けてある様子が一部に残っていた。さらに、C区東端でこれと直交する近世水路(完掘幅約5m・深さ約2m)が検出された。両水路とも、17世紀後半の横須賀御殿窯の小分焰柱2本(ともに長約30cm、直径約15cm)ほか窯構造物・窯道具が多数と、陶器片も若干出土している。また、C区西端には柱穴があり、1間×2間に並ぶ掘立柱建物がある。

ま と め A区は砂堆(浜堤)の東端で、後背湿地への変換部分に相当することがわかった。B区は弥生時代から古墳時代初頭にかけて墓域であったことが判明した。また、古代(7世紀頃)には竪穴住居群が展開することがわかった。C区は弥生時代中期後半以降、断続的ながら古代(8世紀頃)まで集落域であることが判明した。(木川正夫)



第1図 調査区位置図(1:2,000)



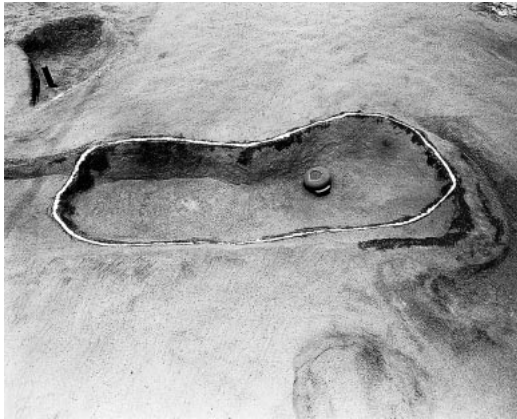
第2図 調査成果概念図



B区 A期土坑墓遺物出土状況(南より)



B区 A期土坑墓遺物出土状況(西より)



B区 B期土坑墓遺物出土状況(東より)



B区 C期土坑墓遺物出土状況(南より)



B区 D期竪穴住居完掘状況(南より)



C区 弥生~古代完掘状況(西より)



C区 近世水路完掘状況(西より)



C区 小分焰柱出土状況(北より)